
君へ、自分を大切に

柊 亜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ、自分を大切に

【Nコード】

N5231D

【作者名】

柊 亜子

【あらすじ】

私とミヤビと彼、そして周囲の人々。ミヤビは何を思い、感じているのだろうか？そして私は？私とミヤビは何処に向かっているのか…

1 (前書き)

女性という生命体に対して、高い理想像を掲げている方は落胆されるかと…

私、ミヤビはある事を境に流される事で生きている。

流されるとは綺麗な言い方で、シビアな言い方をすれば何事も考える事なく、その場の雰囲気飲まれ漂い、何となく生きている。

何となく生きてても死なないのは、自分を自分でアヤメル勇気が無いだけだが…

ところで、ミヤビは本名ではなく呼び名。

本当の私の名前を知るのは両親と数人の友達、そして私が惚れてしまっている男だけ。

本名等最低限の人が知っていれば良い、葬式の時に来て欲しい人達程度で。

その為ミヤビの世界は現在拡張し続けている。

ミヤビは、派手で華やかで露出狂で、男を喜ばせる事を目的としている。

所謂、愛人タイプ。

実際に愛人なのだが…

ミヤビは一人だけの男相手では息が詰まるらしく、常に複数の愛人を掛け持ちしている。

男に消費され、振り回され、結局は傷つく自分いるのが分かっているのに、

ミヤビはこの流される生き方をやめられない。

一体どこに流されていくのか、行き着く先は何処なのか現時点ではさっぱり分からない。

それを考え始めると、ミヤビと私は先行きの霧の深さに頭痛と目眩がして考える事をストップさせてしまう。

そんな時に私とミヤビは彼に出会った。

彼とミヤビはケータイの出会い系サイトで知り合った。

今迄私が生きていた世界では出会えない人間に会うリスク：それは使い方次第。

誤ればババを引く。人生ババヌキ。

勿論ミヤビにそんな事は無関係。

ただミヤビを知らない人と会う手段。

出会った彼は好意を持った。

ただそれは…ミヤビではなく私に。

私はミヤビとして名乗った人間に、一切私を出さない。

私の存在を知っている人間を増やす気は全くないから。

何故、彼は私に気付いたのか？

私はミヤビとして完璧に振る舞ったはずだ…

そんな不思議な彼に出会ってから、少しずつ私とミヤビのバランスが変化し始める。

勿論、愛人として生きているミヤビは変わらない、変わらない。

私を失望させ、疲れさせ、嫌悪感を与え続ける男達相手に、

ミヤビは笑顔を振り撒き、媚びを売り、愛人として振る舞う。

ミヤビは、スタイルがあらわに見える服を纏い、髪を結い上げ、他の男から注がれる卑猥な目を称賛と見なし、真っ直ぐ前を向いて歩く。美味しい料理や上手い酒を体に取り込み、高級とされている場所に入りし、惜しみなく金を使う。

愛人として、どうやったらミヤビに金をかけてくれるか？それがミヤビの興味ある事。最重要事項。新しいレストラン、新しいホテル、流行りの場所：別段に興味は無いがミヤビは金の掛かる場所が大好き。

他人と被る可能性があるブランド品にはミヤビは興味が無い為、食事が優先となる、結果として舌も肥える。

マズイ物、安い物は一切受け付けない。

そして私はミヤビの存在しない時に普通の会社員として働き始める。
私とミヤビのバランスの変化、私がミヤビに成り切れなくなっ
たい理由、私は彼に興味があるようだ。むろんミヤビには関係無い。

私は、小さい時から自分の外見にコンプレックスを感じていた。狭い額、細い目、並びの悪い歯、そして内気な性格に隠れてしまう、表現が出来ない虚栄心。

赤面症で小学3年生から男の子とはほとんど話せなかった。完璧主義で融通が効かず、頭でっかち。

本は読む事は大好きだったが、勉強はイマイチ。両親共に公務員だったから馬鹿ではないはずだけれど…特別に勉強出来る方ではなかった。

おまけに音痴で運動も不得意。

ここまで来ると、なけなしの自信も無くなり性格も暗くなり周囲に対して過度の被害者意識も強くなり…

悪循環にはまりやすいのは時間の問題。

もちろん、私は悪循環にはまり、直ぐにイジメの対象になった。

女の子達にイジメられたのでそれ依頼、女は嫌い。

可愛い子や綺麗な子は特に。

幼いながらも世の中の不平等さを肌で感じた。

綺麗な女は価値があり、不細工な女は疎まれる。

分かりやすくも残酷な現実。

私は何とかこの状況から脱出したかった。

そんな焦る気持ちとは裏腹に私は何時しか高校を卒業していた。

気持ちだけはあったのだが、結局は何もしなかった。

何をしてよいのか分からなかった。

気になる男の子はいたが告白も出来ず誰とも付き合わず。

辛うじて友達…と呼べる女の子が出来た事位か。

進学してから私は変われず…

周囲では彼氏が出来た、デート、キス、初体験…

そんな話ばかりが耳に入ってくる。

こんな容姿の私は、誰からも興味を持たれず、いつの間にかオール
ドミスになっていくのか？

こんな気持ちは何時からだろう。

思い返せば私はミヤビになってから早々に、

サイトで出会った初対面の男と関係を持ち処女を捨てた。

ミヤビとしては、処女という価値を有り難がる男に売ってしまえばよかったと

今でも後悔している。

感想としては余りの痛さに相手をグーで殴り流血させた程度。

殴った事は悪いとは思うが、

初対面の女を部屋に連れ込み、犯したのだから殴られても文句はあるまい。

もちろん接点はその一回。

私が処女だった事を知るや否や男の態度は冷たくなった。

私が処女喪失を盾に男に執着するとも思っただろう。

だが私は余計なモノが無くなってスッキリした感覚だけだ。

恋愛感情無くても関係は持てる。

確信と少しだけの驚きと落胆。

それまで私が好きだった男の子は、私がなかなか抱く事を私が許さなかったので去っていった。

二十歳そこそこの男の子からの誘いを散々はぐらかし、受け入れなかったから仕方ない話だ。

おまけに私は男の子と会う時に下着にはかなり気合いを入れていたのに…

私が一言「抱いて」の言葉を発していれば良かったのだが。

私の外形に対する自信のなさが恥ずかしさになり、どうしても男の子を受け入れられなかった。

処女をあっけなく喪失してみて、男は女を抱く為に甘い言葉をいとも簡単に使いまくり、最終的に女を抱けないとさっさと別の女を探

して去っていくどうしようもない生き物。男はただの雄だ。私の身体にのみ用のある生き物。その為に挨拶の如く「愛してる」等という言葉を使まくり、事が終われば全て忘れる都合の良い生き物。私はミヤビに囁いた。

ミヤビは、本当に色々な場所でミヤビを買う男と会ってきた。最初は新宿に事務所のあるデリヘル。

デリヘルは本番無。その分料金も安い。

だけど男達は入れさせる事を懇願する。

それを一々なだめすかす事が面倒臭くなり、

それなら最初っから最後迄と割り切っている大塚のホテルに。

ホテルの仕事はデリヘルよりも全然楽だった。

客が終わる迄、笑顔を張り付け適当に演技さえしていれば良い。

基本的に受け身で問題無し。自分がサービスしなくて良いから楽だった。

おまけに店の看板として雑誌にも写真バンバン出ていたから、どんなに暇な日でも稼げた。写真指名の場合はまずチェンジされる事はない。

客がイメージと合わない女の子をチェンジ出来る権利を持つから女の子は外見が最重要課題。

チェンジされていたら時間も勿体ないし、何より女としての自信を傷つけられてしまい精神衛生上、非常によろしくない。

「チェンジ」この一言はかなりイタイ。

ミヤビの売りは顔と胸と脚。

ただし、一晩で多いと5、6回は風呂なりシャワーなりを使用するのでメイクはあくまでも簡単に直せる程度にナチュラルに。

髪も自毛が中途半端に短かったので部分ウィッグを使い、濡れても外せる偽ロング。

胸元は服の上からでも露骨に大きさと谷間が分かるような服を選び、脚元はもちろんミニスカートにヒール靴。これがミヤビの戦闘服。稼げる子、客を引っ張れる子は事務所の人間も可愛がり、我儘や融通も聞くようになり大事にされる。

シビアだから解りやすい社会、先輩後輩何て関係無。

その事務所に所属しているメンバーの中で客受け良いかどうか、ただそれだけ。

ミヤビはどうも買っ男達にとっては忘れられない子らしい。その理由は簡単、それはミヤビが感じやすい子を一贯して続けていたから。男は自分の愛撫で感じ、イク等と連発している女に悪い気はしないらしい。むしろ相性合う等と前向きに解釈する。

笑顔でさえいれば、心の中で殺意に近い悪態着いても男は決して分らない。

ミヤビは仕事中は完璧な女優です。

私はそんなミヤビが好きでもあり、嫌いでもある。

ミヤビのご機嫌良い時は私は何も余計な事を考える事なく、楽しく時間を使い、外に出歩き、お金にも不自由しない。

逆の時は大変だ。人生そのものに嫌気がさし、外との接触を避ける為にベットから起き上がれない。

私が仕事を始めてからミヤビは私の休みの日に動くようにしたから、まだ私の仕事自体に支障はなかったけれど。

だけど私は職場では周りの女達となかなか上手くいかなかった、ミヤビの存在有無ではなく私は女という生き物が苦手だった。

私よりも長く働いているという理由だけで何もない女、

他の女に媚びを売り上手く立ち回る女、

私は媚びを売る事も自分自身を謙遜させる事も一切しなかったから可愛い毛はない。

職場でも陰口を言われイジメられるとは：年齢か環境は関係ない、女は自分が常に一番で居たいし周囲からもそう扱って欲しい生き物ただ幸いにも、選んだ仕事が技術系の客商売だったからお客に気に入られて指名されれば、されただけ私の立場は面白いように変わった。客からの指名を取れば立場は安定。住んでる世界は違うのにミヤビと同じルール。

私は職場の人間関係は不器用だが、働く事自体は好きだ。自分がした事で自分以外の他人が喜んでくれる事は好き。

私は技術を身につけ更に上手くなれば私自身の必要性が上がる事が分かり、関われる分野も広くなる事を知った。

私はこの技術の世界が好きになった。技術を磨き、新しい知識を学び、それを客相手に実践して経験として身につけていく。

やればやるだけ、自分のやる気次第で良い方に変化する。私とミヤビの共通点が一つ見つかった。

ミヤビも私も、他人に必要とされている実感を欲しがる。

だから、自分よりもまず他人を気遣い周囲の目が気になって仕方がない。だけど、自分よりも努力しない、能力ないと判断するとそれに大してはかなり冷たい。そこがミヤビも私も、損している部分。元々、敵を作りやすい特徴を持っているのだから…絶対に敵は少ない方が良くに決まってる。特に私はミヤビの存在する環境ならば許されても、許されない状況が多いから。そして段々、私はミヤビに戻っていつてしまった。

職場という人間関係が嫌になり、ミヤビの方が生きやすい…

私は転職を繰り返し遂に出社拒否になり半年間家から出れなかった。昼夜問わず寝ているか、TVをぼくと眺めているかのどちらか。食事もしない。

外出はミヤビが客との約束がある時のみ。

収入も生命維持に必要な食事という行為もミヤビが動けたから何とかなった。

ミヤビが居なければ私は確実に死んでいた。

結局はミヤビを愛人として見る男という対象相手にしか、ミヤビも私も必要とされないのだろうか。

悲しいような虚しいような、でも客はミヤビに会えて喜び金を払う。私とミヤビ、二つの人格で一人の人間だけと必要とされているのはミヤビだけ。

私は彼とも距離を置いてしまっていたから、私は私の必要価値がわからなくなってしまった。だが、私が死んでしまうと、必然的にミヤビも命を落としてしまうので…ミヤビは私を巻き込んだの擬似恋愛相手を見つけてきた。

ミヤビも私も、他人に必要とされている実感を欲しがる。

だから、自分よりもまず他人を気遣い周囲の目が気になって仕方がない。だけど、自分よりも努力しない、能力ないと判断するとそれに大してはかなり冷たい。そこがミヤビも私も、損している部分。元々、敵を作りやすい特徴を持っているのだから…絶対に敵は少ない方が良いに決まってる。特に私はミヤビの存在する環境ならば許されても、許されない状況が多いから。そして段々、私はミヤビに戻っていつてしまった。

職場という人間関係が嫌になり、ミヤビの方が生きやすい…

私は転職を繰り返し遂に出社拒否になり半年間家から出れなかった。昼夜問わず寝ているか、TVをぼくと眺めているかのどちらか。食事もしない。

外出はミヤビが客との約束がある時のみ。

収入も生命維持に必要な食事という行為もミヤビが動けたから何とかなった。

ミヤビが居なければ私は確実に死んでいた。

結局はミヤビを愛人として見る男という対象相手にしか、ミヤビも私も必要とされないのだろうか。

悲しいような虚しいような、でも客はミヤビに会えて喜び金を払う。私とミヤビ、二つの人格で一人の人間だけと必要とされているのはミヤビだけ。

私は彼とも距離を置いてしまっていたから、私は私の必要価値がわからなくなってしまった。だが、私が死んでしまうと、必然的にミヤビも命を落としてしまうので…ミヤビは私を巻き込んだの擬似恋愛相手を見つけてきた。

擬似恋愛相手は横浜の会社経営者、ミヤビが見つけたからシガラミ無い子持ち既婚者。

その人は私の父親の年齢に近かったけれど、服装や話し方や内容はかなり若く見えた。

その人も最初は私には気付かなかったけれど…最後は私に恋をした。私に気付いたのは、ミヤビが私を説き伏せて私を出したから。

その人がミヤビをかなり気にしていたが家庭も大切にしていたのが分かったから。

家庭を大切に出来ない男は駄目だ、まして子供がいるならば。

子供が居るということは一度は子供を幸せに育てる覚悟をしたという証。

その覚悟をしても家庭を大切にしないのは、上っ面の覚悟だったという事。

その覚悟を通せないのはこミヤビともトラブルを起こすからだ。

できちゃった婚も二人で仕組んでならば問題無いが、セックスの快楽を男が求めた為に発生する場合も多いから。

勿論、それがきっかけで大切な家庭が生まれるのも事実だけど避妊は男の義務、女も望まない妊娠をしたくないならばピル等の薬の知識を知っておくべきだ。

モーニングアフターピルさえ飲めばほぼ妊娠しないし面倒臭ければ低容量ピルの毎日の服用等。

産まれてくる子供に罪は無いし、母親以外の女にウツツを抜かしている事を気付かれる父親程馬鹿な男は無い。

経済力無いのにセックスの快楽ばかり追い求める男は稼ぐ能力が低い為未来は明るくない。

何はともあれ、その人のおかげで私は知らなかった世界を見た。

ミヤビは客と海外旅行には行かなかった。

理由はパスポート。私名義で個人情報満載。

私はビジネスクラスでの移動やカジノの興奮も覚えた。

どんなに晚くなっても自宅迄車で送らせる事、私の悩みや愚痴を話す事も。

でもその人は私を知ってから、プレゼントはくれたが一切金を払わなかった。

その矛盾に気付いて擬似恋愛は終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231d/>

君へ、自分を大切に

2010年10月26日05時52分発行